

孟蘭盆節都下女兒戴華笠蒙彩綺前後相列恰似貫珠且步且歌者呼稱遠牟古具樂美按是清嘉錄所言走月亮之類清嘉錄婦女盛粧聯袂出遊互相往還謂之走月亮 芋幹一束燎之門前燎後灌水則祖先歷世神靈皆降臨云迎神之儀法華宗在十二日晚眞言淨土及禪諸宗在十三日途神總條樂美竊按此儀雖疏筭在中元夕一向宗絕無此儀菅茶山嘲鷲公詩實的當既見本願寺條 臭實似周代之遺制謹考古禮有酌鬱鬯降神之儀焉朱注云方祭之始用鬱鬯之酒灌地以降神也 嗚呼徒知尊天竺古先生而不知西土古先王之禮猶存矣 我邦中元人家挂籠燈始于寬喜中按江家次第公事根源日本紀略所言各不同漢土張燈屬上元其於中元自宋始按通鑑宋太宗紀曰太平興國三年七月中原張燈云々又見山堂肆考及洪邁俗考此日蒸糯米荷葉裹之獻祖先邦俗呼荷白蒸ハスシラシ 卽是彼土荷包白飯也出于東京夢華錄略 中

吾佩雙刀僕拏槍采蘋曉獻露珠香墓前拜禱安全事祖母七旬長在堂

〔長崎聞見錄一〕長崎盆祭の事 長崎の風俗にて七月十三日は迎火十五日は送り火とて墓前に大きな雪洞ボンボリをかけつらね夥しく見ゆその墓は皆四方の山々にあり略 中 扱藁にて船を作り生靈を祭りたる種々のものを皆積み此船にも小きほんぼりを多く掛つらねて持行大きな船は一二間もあり人拾人貳拾人もかゝるまた貧家の船は小さく壹人にて持たるもあり大波戸といふ海濱にて火を付て推流す其火海面にかゞやきて流れ行くさま夥しき也此夜はみなみな寝る人なく曉比まで如斯さわぎて賑々しきなり

〔日本歲時記七五〕十五日 又今日世俗山海の漁獵をせずもろこしにもかゝるにや唐の百官志に中元日非供祠不採魚と見えたり

〔東遊記乾〕一松前略 中 七月はあらし用向もすみ静なる故兒女共皆躍をおどりて遊ぶ躍は餘國よりも上手也精靈祭は武家町人ともに七月十三日の夕先祖の墓ある所にまうで燈籠を